

論考・ポスター

庵野（オヤジ）が語るオヤジのキモさ ——ラブ&ポップ映画評

映画『ラブ&ポップ』について

『ラブ&ポップ』は、村上龍の小説『ラブ&ポップートバースⅡ』（1996年刊行）が原作の日本の実写映画（1998年）。題材は援助交際。

監督は庵野英明。庵野監督初の実写映画作品であり、スタッフロールの名前の後ろには「庵野英明（新人）」の表記がある。主題歌は三輪明日美の『あの素晴らしい愛をもう一度』。脚本は薩川昭夫。

映画は原作を翻案したもので、女子高校生の休日と日常を織り交ぜ、援助交際を題材に彼女の変容を撮る。実写作品ながらしっかりと庵野作品の作風を保ち、ドキュメンタリー風に仕上げている。

この論考について

ここでは映画における会話に軸を置き、それらを採用・分析することによって一側面からの体系的な把握を促すことを目的としています。

また、採取されたデータからグラフィックを生成し、視覚的に面白く、効果的な新しい形の論考を目指して組み立てています。かなり実験的なアプローチだったため手探りで行ったものとめしました。

本論考の試み

論考ではアプローチとして巨視的なものが採られることが多いです。何かを論じるときに論点となる項目の粒度を固定しなければ構造は見出しづらく、あるいはいくつかの粒度を扱ったアプローチでもその補助として、何らかの軸を据えます。本論では、映画を語る上でよくデータとして用いられるようなシーン割り、入場者数や構造などメタ的な物ではなく、主人公と登場する9人のオヤジの会話を全て文字起こししたテキストデータを用いて、微視的かつ物語へと肉薄した視点から映画全体を語ることを試みました。会話のテキストデータは、単語・文・トピック・文字数、発話者・反応者など多種多様な粒度のものとして扱い得るデータです。会話というデータを用いて映画を巨視・微視間をリニアに移動しながら語ることです。今まで獲得し得なかった新たな視点にたどり着けるのではないかと考え、このようなアプローチを選択しました。

また、「会話」というモチーフを選択した背景としては『ラブ&ポップ』における会話の特殊性が大きく関係しています。監督である庵野英明はアニメ畑出身であり、実写映画ながらコミック的表现（デフォルメされ、リアリティレベルが低くなった人物表現。異様に早口・饒舌など）を用いることが多く、実写映画では見られない意識的な会話への脚色がより多く見て取れます。それらの脚色された会話は庵野英明にとって恣意的なアプローチであり、その偏りや、キャラク

ター同士の比較から編集・脚色における傾向、論じるべき点が見出されるのではないかと考えました。今回、『君たちはどう生きるか』などのナウい映画ではなく、『ラブ&ポップ』という私が生まれる前に公開された作品をいまさら取り上げたのは、手段が先行して、会話による分析をする際にそのアプローチが最も活きる映画を探していた、という理由があります（まあ、単純に庵野作品が好きだというのもあります）。

論考：庵野（オヤジ）が語るオヤジのキモさ

本作におけるオヤジ

映画『ラブ&ポップ』の中で唯一のテーゼはオヤジは気持ち悪いというものです。僕が勝手にオヤジ博覧会と呼んでいるこの映画では、1時間52分の中で何人もの個性豊かなオヤジが取り上げられます（うち裕美（主人公）と会話する、または会話しようとするのは9人）。通常の映画の中で物語に深くかわからない、舞台装置としてのキャラクターを同じ属性でここまで多様に用いてしまうと、キャラクターが増え、視聴者が把握困難になるために、そのような状況を避ける映画が多く、珍しいアプローチです。つまり、『ラブ&ポップ』の中でオヤジたちはある明確な

意思をもつて多く登場させられています。さらに、オヤジたちは物語の中で継続して描かれることなく、使い捨てされ、ブツ切られて登場し、インスタントに気持ち悪さを演出しては捨てられます。オヤジに物語としての連続性がない＝情報量が少ないことはキャラクターを演出するうえで気持ち悪いという第一印象を固定することに他なりません。援助交際を行うオヤジは休日、または休憩時間のオヤジ達です。本来オヤジとしての価値が発揮される仕事上の姿は、物語上切り捨てられて、丁寧にマスキングされ、オヤジの気持ち悪さのみが残ります。これらの演出は非常に合理的だと言えるでしょう。また、この映画におけるオヤジの描き方にも特徴があり、個性豊かと前述したように、庵野はオヤジの「オヤジらしさ」を抽出し、オヤジを象徴化、キャラクター化してキモく撮ることに心血を注いでいます。マンション連れ込み洋食パーティー早口オヤジこと「ヨシムラ」、レンタルビデオ屋ツバ吐きオナニーオヤジこと「ウエハラ」などは視聴者に一度見たら忘れられないインパクトを残すでしょう。これらは自明なものとして行われていて、庵野はアニメーション監督で獲得したキャラクター演出の能力を惜しげもなく使い、気持ち悪さをデフォルメ・演出し、非実在としてのオヤジをありありと打ち立てます。

始めに『ラブ&ポップ』の中に存在するテーマの一つであると述べました。その根拠は、この映画は物語よりもドキュメンタリーに近い形式で映像を構成していることです。具体的には、定期的に入る語りパートを参照するとわかりやすいように、本来、語り・物語に必要不可欠の「軸」がこの映画にはありません。物語は対比されて初めて知覚できるものです。同じ構図の場面が登場し、その二つの間で差異が認められると初めて物語は進行したことになります。しかし、『ラブ&ポップ』では同じ構図の場面が登場せず、語りパートで語るテーマもバラバラで、一貫性はありません。『ラブ&ポップ』では「裕美」の変化、差分を描かずに、ただそこに存在する主人公をアクチュアリティを持って撮り続けます。そこには物語としての分かりやすさを排除する姿勢が見受けられます。仮にドキュメンタリーがアクチュアリティを殺し、演出を施し、フィクションにまとめ上げることだとすると、物語でありながらアクチュアリティを求める『ラブ&ポッ

『プ』はドキュメンタリーよりもドキュメンタリーをしているのではないのでしょうか。また、原作にあるいくつかのテーマを庵野は描こうとしなかったのもその補強になり得ます。

本作で語られるオヤジのキモさ

本作でのオヤジの役割は作中において、女子高生との非対称性の強調です。また、メタ的な視点においても大きな役割を持っています。この章からは会話というモチーフを通してその気持ち悪さを論じます。

女子高生との非対称性

『ラブ&ポップ』で行われる女子高生とオヤジたちの会話は大きく非対称なものです。ポスターに記述した反応率（会話を始める際に相手に投げかけた文字数を分母とし、その返答にかかった文字数を分母とした数字）を見れば火を見るより明らかですが、会話においてオヤジは女子高生から反応をもらうことは中々ありません。庵野はこの会話の歪さ、非対称性を前述した通り、意図的に演出しました。サラリーマン風の男（俺のホンタマの×が受注生産で凄いと裕美にしつこい路上ナンパをする男、00700ごろ）はついにその20秒間のナンパの中で裕美に一切の反応をしてもらうことがかなわず、「ああ……」と情けない声を上げて離れていきます。その反応率は勿論0%です。このように、会話における反応という形で表現される歪さを我々が傍聴し、不快感を抱きます。また、発受が逆転して主人公である裕美からオヤジに会話を投げかけた際には、反応率は272.43%と、異様な数字を叩きだします（ポスター下部、吉井裕美の欄）。顕著な

例としては、1934年の「キャプテン××の男」と裕美の会話で、裕美が「その子とはいっ知り合っ
たんですか？」と質問を投げかけたのに対して、「キャプテン××の男」は「十年以上前かな？
親父とお袋が離婚する前の年の暮れだから、十年以上前か。家族三人で旅行に行ったんだ。確か
フロリダの××ワールド行ったんだけど。親父と俺がそれが最初に最後の旅行になっちまった。
キャプテン××、そのころにフロリダで始まったばかりだったから、ロスでももちろんレース
でもやってなかった。三日間は通ったかな？ 映画を十回以上見たよ。二日目にお土産屋で××
にあって。欲しいって言ったら親父がすぐを買ってくれたんだ。親父と映画見たのはあれが最初
で最後。親父はつまんねえって顔してたけど、大人の俺が見ても面白いんだけどなあ。それでも
十回以上一緒に観たんだ。××の本名は親父がつけてくれたんだ。まだ世界中で俺と親父しか知
らない。」と聞いてもいないエピソードをディテールまで語ります。

それらの自己中心のかつ反応率の低い語りたちから来るオヤジたちの異常性は、多くが独りよ
がりさを発端としたものです。聞いてもいない事、デリカシーのない事、自己完結している事、
それらを、自分語りの快楽のために永遠と垂れ流し続けます（オヤジたちの発言の節々に見受け
られる独りよがりさはポスターに印刷された文字起こしからより感じられるのは是非、飽和した
独りよがりさを堪能してください）。そして、これらの特徴は庵野がキモさを論理的に組み立て
ていることの証明であり、庵野はそれらを効果的に使うことによって買われる存在／買う存在と
いう構造や価値ある存在／価値ない存在という構造をより際立たせています。『ラブ&ポップ』
では、ついに裕美は性交をすることはありませんが、庵野は援助交際という行為の歪さを、会話
だけでうまく表現することに成功しました。

オヤジたちの独りよがりさは、女子高校生との対比でより際立ちます。援助交際パートと友人
パートが入れ替わりで写される本作で、友人パートは日常とメタ視点の役割を持ちます。日常的
な友人パートが非日常としての援助交際・オヤジパートと対比されるのは説明するまでもありま
せん。メタ視点について、日常・友人パートにおいて裕美とその友人たちはオヤジを評します。

オヤジの言動について仲間内で振り返り、それについての認識を共有・共感して共通のものとしていきます。視聴者は自らの認識も彼女らに合わせて調整します。さらに、そういったケアの倫理的思想をもった極めて女性的な集団、かつオヤジたちを評することが可能な友人たちと対照的に、オヤジたちは孤独でその内面は一切語られないため、その有り余る性欲だけが非人間的に表出しているように見え、視聴者がオヤジたちに感情移入する隙を徹底的に排除しています。

このように、本作では庵野はかなり冷徹にオヤジをキモいものとして撮っているのです。

メタオヤジの存在

オヤジを気持ち悪いものとする、ということはそのままオヤジである庵野を、視聴者の中に存在するオヤジを否定する、自傷的な側面を伴うことになります。また、庵野はインタビューで「たぶん僕と同じくらいのおじさんが見てなんか一番面白いのになっちゃってる」(ラブ&ポップ公開時インタビュー、ニュースJAPAN YOL 300秒の肖像・1998年)と語っていることから、そのことに自覚的であることが見て取れます。オヤジがオヤジを攻撃する映画を作り、それをみずから面白いと評価するということは、自傷行為、つまり気持ち悪いと蔑まれることによるマゾヒスティックな陶醉を肯定するということです。新世紀エヴァンゲリオンなどでも自傷行為をテーマとして扱った庵野ですが、ここではその自傷行為をシンジ君ではなく、メタ的存在である視聴者と自らに強要します。これには、旧劇場版で「気持ち悪い」と視聴者に言い放った攻撃性を自らにも向けたという明確な変化が見て取れるでしょう。気持ち悪い事に自覚的であることとの、より直接的な要素としては、カメラワークが挙げられます。変態的、エロティックなカメラワーク(スカートの中にカメラを入れるなど)が多い本作において、カメラマンにそのようなカメラワークを指示するということが、それ自体が自身の気持ち悪さを認めるという行為に他なり

ません。

村上龍の原作小説ではなかったその自己言及性を、旧劇場版・新世紀エヴァンゲリオンではでは持ち得なかったその静かな内省を庵野が獲得・表現したのがこの映画です。あえて主題から視線をずらし、会話・オヤジという側面から見る『ラブ&ポップ』は異様な光景でしたが、そこには気持ち悪さを越えた価値があると強く確信しています。

やがて私もなりゆく「オヤジ」という存在に諦めと期待を感じながら。

試みの評価

手段が目的と入れ替わってしまった本論ですが、図式・会話という試みについての評価という観点から振り返ってみると、概ね成功したのではないかと思います。しかし、課題や気づきも多く残りました。論の粒度を多種多様に設定し、それらを複合的に取りまとめるという試みは、粒度の分解が発散する行為なのに対して、評論自体が収束させて一つの論を構築する行為で、お互いの背反した性質から相性が悪かったように思います。しかし、図、及びポスターとしてそれらを一覧可能な状態に起こすことは確実に今まで取り得なかったアプローチで、効果的だったという実感がありました。そのようなアプローチは今後も続けていこうと思います。また、発散と収

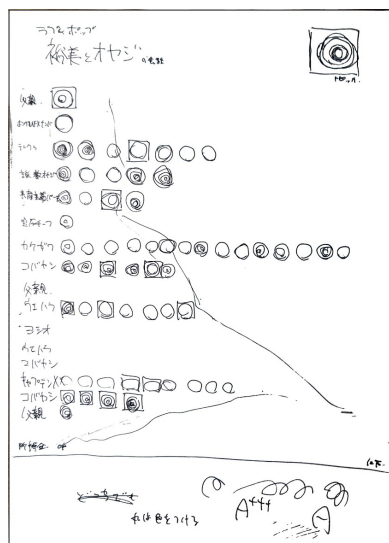
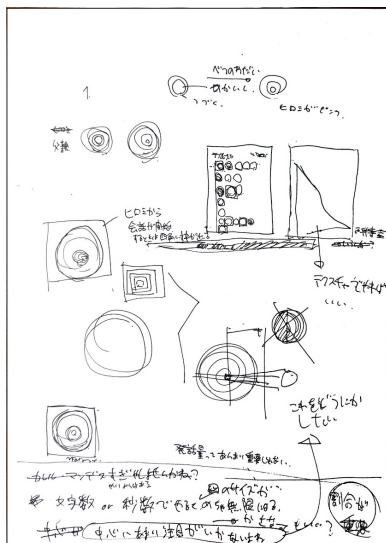
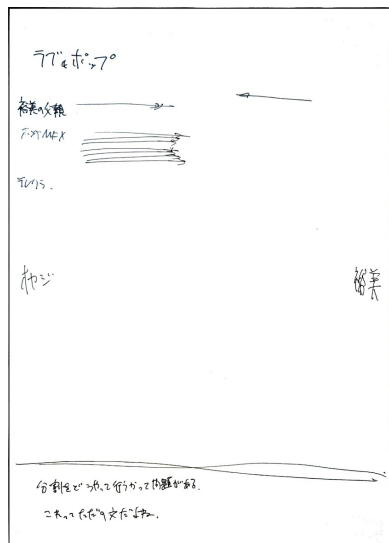
東の関係を考えるに、評論及びデータの図式化は別件として行った方がいいのかもしれませんが。

図・ポスターについて、ある種このようなものを二次創作的に作ってしまうと会話における文字以外の要素、例えば話すスピードや声質、張りなどを排除してしまうことにもなってしまうことにも繋がりがかねません。それらについては改めて考える必要を感じました。

映画の文字起こしについて、かなりコストパフォーマンスの悪い行為だということを認識しました。一字一句聞き漏らすまいと聞き取りづらいオヤジたちの早口に傾聴し、ねっとりとしたナンパ文句を耳にタコができるまで何度も何度も繰り返し聞くことはかなり精神を蝕みます。しかし、世の中にはそればかりか翻訳まで行われる字幕翻訳家の方々がいらっしやるわけで、本当に頭が上がらない思いでした。音声認識AIの導入も検討したのですが、BGMや環境音が大きく入る映画において、精度の問題から見送りました。

改めて、実験作（プロトタイプ）ながらやはりこのようなポスター・図示は効果的なことを確信したので、今後も暇をみつめて様々な作品の論考に引き継いでいきたいと思っています。

< ポスター制作下書き・エスキース >



2023年に作成、反仮想体（1）に収録したものを再掲。

白書オオキ（はくしょ・おおき）

oki whitepaper

多摩美術大学統合デザイン学科在学。2002 年生。東京都在住。小説、評論、漫画を描く。大学ではシリコン成型から Web デザインまであらゆるデザインを学ぶ。また、SF を主ジャンルとする漫画家志望でもある。

趣味は読書と映画／アニメ／漫画／音楽鑑賞、あと卓球。バイブルは伊藤計劃『ハーモニー』、『イノセンス』（攻殻機動隊 2）。嫁は戦場ヶ原ひたぎと桜島麻衣、御冷ミヅハ。

contact : oki@half-create.org

041.whitepaper@gmail.com（個人アドレス）

https://twitter.com/wp_041

白書オオキ @wp041 庵野（オヤジ）が語るオヤジのキモさ——ラブ&ポップ映画評

私的利用の範囲を超え、無断で複写・転載・公開することを禁じます。ただし、本誌の紹介や引用は著作権法に基づく範囲でご自由にご活用ください。

皆様からのご意見、ご感想をお待ちしております。

No reproduction or republication without permission.